

2022年11月20日降臨節前主日

エレミヤ書 23 章 1-6 節

コロサイの信徒への手紙 1 章 11-20 節

ルカによる福音書 23 章 35-43 節

最初にわたくしごとで申しわけありませんが、先週の11月17日、18日はお休みをいただき感謝でした。しかし、昨日19日の早朝から咳と発熱が治まらず、コロナか否か検査はまだですが、大事を取って、本日のぶどうの木の前、聖餐式を失礼させていただきました。礼拝後は、久しぶりのバザーがありわたし自身、楽しみにしていたが、大変そちらも欠席で申し訳ありません。また、昨日は、教区会がありました。こちらも欠席となりました。コロナ禍はそろそろ終わりかと思っていたのですが、まだのようでした。

さて、終わりといえば、本日は、聖霊降臨後最終主日です。聖霊降臨後最終主日でもあります。日課の福音書は、イエス様の十字架の物語とエルサレム入城の二種類が用意されていますが、十字架の物語の方を選びました。他の国々では、この主日にイエス様のエルサレム入城を祝う習慣がありますが、日本の教会はそれをだいたい大斎節に行うからです。読み続けてきた「ルカによる福音書」の物語の流れとしては、かなりお話がとんでしまっていますが、本日は、イエス様の十字架の上での出来事から、学びたいと思います。

物語は極めて分かりやすい構造を持っています。イエス様が十字架に架かる時、二人の人が一緒に十字架刑に処され、ひとり最後までイエス様をのりしり、もうひとは悔い改めるといふものです。悔い改めというテーマを、物語全体を通して強調する「ルカによる福音書」において、究極の悔い改めの場面といえます。

聖書日課では、イエス様のほかに二人の人がいることが前提となっていますが、物語は、23章32から33節で「ほかにも、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。『されこうべ』と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。」と告げています。

「犯罪人」という言葉は、「ルカによる福音書」のこの物語の中と、「テモテへの手紙二」にしか用いられていない言葉です。字義通りの意味は、「悪い業の人」ですが、一般的な「悪い人」というよりも、法律で裁かれた「悪人」の意味で用いられています。それゆえに「犯罪人」と訳されているのですが、犯罪の内容はわかりません。ただし、十字架刑は、ローマ帝国に対する重要な犯罪対象に行われる刑ですので、この二人もそのようなことなのでしょう。マルコとマタイでは「盗賊」となっていますが、こちらも単なる盗人ではないと思われます。

この二人と一緒に十字架につけたということは、イエス様も同様の人間とみられて処刑されたということになります。22章68節から、イエス様

は、最高法院で裁判にかけられます。つぎに23章に入り、ローマ帝国のユダヤ総督であるピラトから尋問を受け、さらにエルサレムに滞在していたガリラヤのヘロデ王からも尋問を受け、最後にピラトが議員と民衆に彼らの意思を確認して、死刑の判決を受けています。ローマ帝国に対する罪は見いだせないのですが、イエス様は、正式な手続きを経た犯罪人として処刑されたのです。

本日の福音書は、「民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。『他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。』」(ルカ 23:35) という部分から始まります。もう超法規的措置、あるいは超自然的出来事以外に救われることのない状態のイエス様に対して、十字架のにつけた人々が、軽蔑しながらののしります。彼らの軽蔑の言葉から、彼らがどのような救い主を期待していたかがわかります。彼らは、「他人(複数)を救った」とイエス様が様々な人を救ったことを認識しています。それだけでも十分に素晴らしいと思うのですが、それ以上の活動を期待していたのです。そして、自分を守るために何の力も示さずに、ただ十字架にかかり敗北する姿を示に、「神からのメシア、選ばれた者」である要素を見出せなかったのです。

十字架刑の作業にあたったローマの兵士たちも「イエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」(ルカ 23:36-37) とののしります。「酸いぶどう酒」は、十字架の苦しみを長引かせるためですが、彼らはイエス様を「ユダヤ人の王」と呼びます。それは「イエスの頭の上には、『これはユダヤ人の王』と書いた札も掲げてあった。」(ルカ 23:37) とあるからであり、マルコやマタイでも共通しています。

イエス様は、自分を「ユダヤ人の王」と自称したことは一度もありません。しかし、総督ピラトは、尋問の際に「お前がユダヤ人の王なのか」とイエス様に聞いています。イエス様はその問いにはっきり答えずに「それは、あなたが言っていることです」と答えています(ルカ 23:3)。イエス様のこの答えは、直訳しても「あなたが、言っています」としかありません。この発言はどういう意味かいろいろと解釈が分かれるところですが、少なくとも死刑になるか否かの尋問で、「ユダヤ人の王」であるか否かを明確に答えていないのです。このためイエス様は、「札」つまり「罪状書き」としてユダヤ人の王と掲げられたといえるのですが、これは大切な意味を持ちます。

エルサレムはユダヤにあります。そのユダヤにはイエス様の時には、王がいまいませんでした。また誰かが王となるには、同盟国であるローマ帝国の認可が必要でした。勝手に王を名乗ることは、ローマ帝国に対する反逆ですから、そう自称していたのであれば、十字架刑にかけられる正式な理由となります。しかし、そのように物語は描かれていません。「ヨハネによる福音書」のみ、「ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。」(ヨハ

ネ 19 : 21) と説明しているのですが、ピラトにあっさりと断れています。

イエス様を十字架につけたすべての人は、この十字架にかけられたイエス様が、ユダヤ人の王と札・罪状書きをつけられて殺されることを、特に何とも思っていなかったようです。むしろ、ある程度ユダヤ人に対する侮辱として、また皮肉として、あるいは単なる冗談の一つとして、受け入れたといえるのです。しかし、ユダヤ・イスラエルにとって、本当の王とは主なる神様です。人間の王はその代理にすぎません。これがほかの王国との違いです。その意味では、札に明記された事柄といえ、彼らは自分たちの信じる主なる神様が十字架にかかっているのと同様の出来事を、平然と受け入れたということになります。もちろん、そのことに気付いていれば、イエス様が十字架にかかることはなかったのですが、イエス様を十字架につけた人々は、主なる神様に対しても、誤った期待をしていたことを示しているのです。

さて、39節から場面が十字架上の三人に集中します。「**十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』**」と、二人のうち一人は、敵対者たちと同じように、ののしります。最後まで敵を倒して人を救うメシアを期待していたのでしょう。しかし、もうひとりの人は、自分の罪を自覚し、その結果である十字架刑を受け入れ、そしてもしそれでも許されるのなら、「**イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください**」(ルカ 23 : 42) と語ります。彼がイエス様のことを、どれほど理解していたかは全くわかりません。ただ一つ言えることは、彼は、もうすぐイエス様がここで死ぬであろうことを理解していました。そして、そのうえで、そのあと「あなたの御国」つまり、「神の国・王国」に、イエス様が入ることを認識し、また期待しています。言い換えれば、前半の人が、十字架上ですべて終わりと思っていたのに対して、後半の人は、十字架の死後の命を認識し、期待していた、信じていたといえるのです。

さらに彼の姿が示す大切な事柄は、その謙虚さでした。彼はただ「わたしを思い出してください」と求めるだけです。それまでの罪を許してほしいであるとか、償いの方法を示してほしいであるとか、あるいは天国はどんなところでしょうかなどではなく、どうなるかはわからないが、すべてをイエス様に委ねますという宣言をしたのでした。そして、それゆえに、イエス様は「**はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる**」(ルカ 23 : 42) と救いの言葉といえることを語ったのです。

このイエス様の言葉には、すこし説明が必要です。新しい訳でも「よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる」となっており、細かいことですが、現在のように受け止められてしまうからです。しかし、前の口語訳では、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」となっていました。つまり、「いる」という部分が未来形なのです。ギリシア語の未来形は、仮定・推測の意味もありますが、未来に起こることを断言するニュアンスがあるのですが、それがまだ現在ではないこと

を告げます。少しでもだけた訳をすれば、「今日中には一緒に樂園にいるよ」となります。「樂園」とはパラダイスという言葉ですが、新約聖書ではこのほかは「コリントの信徒へ手紙二」と「ヨハネの黙示録」にしか用例がありません。神の国あるいは天国と同じなのか否か全く説明がありませんが、イエス様がいかれるということですから同じなのでしょう。その意味でも、イエス様のこの言葉は重大です。イエス様はこの人に、死の直前であっても、イエス様を信じるならば、樂園に入る、神の国に入る、救われると語っているからです。

「ルカによる福音書」の重大なテーマの一つに「悔い改め」があります。このテーマも「悔い改め」とそれに対する赦しです。本日でC年として「聖書日課」が終わります。本日の福音書が「ルカによる福音書」最後の部分ではありませんが、福音書全体を通した大きな結論を示しているといえます。それは極めて単純な事柄ですが、イエス様の十字架の死、それが命の終わりではなく、命の始まりであることを信じること、そのことのみでイエス様とともに救いにあずかるということです。

もちろん、「ルカによる福音書」は、ただ言葉上で「悔い改め」を示すのではなく、行いにそれが表れることを求めています。その点では、厳しい内容の物語もたくさんありました。しかし、十字架上のイエス様の言葉が示すことは、「ルカによる福音書」という物語が示す「悔い改め」とは、それができなかった人への裁きを目的としたものではなく、また「悔い改め」でも実行できなかった人への裁きを目的としたものではないということです。最後の最後まで、その人が主なる神様に立ち返ることを待ち望む、主なる神様の愛を示すことでした。最後まで待ち望むというのは、先週の親子関係でいうならば、かなり甘い親だということになりますが、本日の物語で、イエスを十字架にかけた人々も、イエス様と一緒に十字架にかかったののしる人も、その最後までイエス様が示す主なる神様の愛を認識できませんでした。しかし、最後に神様の愛に気付いた人を、主なる神様はイエス様とともに受け入れてくださったということです。

本日は、教会内部だけですが、小さなバザーを持ちます。豊かな交わりのひと時となればと思います。2019年までのバザーがいつ再開できるのか、また、これから検討しなければなりません。ただ、わたしたちはこの教会に「悔い改め」を経験した人として集められています。その意味では、わたしたちに示された愛を、社会に示すことが大切です。その第一が礼拝で聖書から学ぶ、聖餐を通して示すことですが、わたしたちに与えられたこの場所でできることがたくさんあると思います。たとえそれらが、コロナ禍や様々な事柄が原因で、十分にできなかったとしても、わたしたちが最後まで主なる神様の方を向き続ける限り、樂園に入る望みを与えられていることを、あらためて心に刻み、広く示していきたいと思います。